

半七捕物帳

鷹のゆくえ

岡本綺堂

青空文庫

老人とわたしと差し向いで、五月の雨のふる日曜日を小半日も語り暮した。時節柄でかめいど亀戸の藤の樽が出た。藤の花から藤娘の話をやび出して、それから大津絵の話に転じて、更にたかじょう鷹匠のはなしに移る。その話を順々に運んでいては長くなるから、前置きはいつさい略して、単に本文だけを紹介することにした。

安政六年の十月、半七があさ湯にはいつていると、子分の一人があわただしく迎えに来た。

「親分。八丁堀の旦那から急に来てくれということですぜ」

「そうか。すぐ帰る」

八丁堀から呼ばれるのは珍らしくない。しかしそれが普通の出
来事であるならば、すぐにその現場へ出張を命ぜられるのが習い
で、特に八丁堀の屋敷へ呼び付けられる以上、なにか秘密の用件
であることは多年の経験で半七もよく承知していた。彼は早速に
湯屋から飛び出して、あさ飯を食って着物を着かえる間にも、そ
の用件がどんなことであるかを想像した。この職業の者には、一
種の暗示がある。俗に、「虫が知らせる」ということが不思議に
的中するためしがしばしばある。半七も黙ってそれを考えていた
が、けさはどうもその判断がつかなかった。その事件の性質がな

んであるか、まるで見当が付かないで、半七はなんだか落ち着かないような気持でそわそわと神田の家を出た。

八丁堀同心山崎善兵衛は彼の来るのを待ち受けて、すぐに用談に取りかかった。

「おい、半七。早速だが、また一つ御用を勤めて貰いたいことがある。働いてくれ」

「かしこまりました。して、どんな筋でございますかえ」

「ちつとむずかしい。生き物だ」

火付けも人殺しも盗賊も生き物には相違ないが、ここで特に生き物という以上、それが鳥獣か魚のたぐいを意味するのは判り切っているので、半七はすこし意外に感じた。なるほど今朝はなん

の暗示もなかつた筈だとも思つた。彼はすぐに小声で訊き返した。

「鶴でございますかえ」

江戸時代に鶴を殺せば、死罪または磔はりつけ刑になる。鶴殺しは重罪犯人である。生き物と聞いて、彼はすぐに鶴殺しを思いうかべたのであるが、相手はほほえみながら頭かぶりをふつていた。

「鶉うずらですかえ」と、半七はまた訊いた。

この時代には鶉もいろいろの問題を起し易い生き物であつた。善兵衛はやはり首をふつて、焦じらすように半七の顔を見た。

「判らねえか」

「わかりませんね」

「はは、貴様にも似合わねえ。生き物は鷹たかだ。お鷹だよ」

「へえ、お鷹でございますか」と、半七はうなずいた。「そのお鷹が逃げたんですか」

「むむ、逃げた。それで、御鷹匠は蒼くなっているのだ。けさ其の叔父というのが駆け込んで来て、おれにいろいろ泣き付いて行ったが、ほかの事とも違うから、打っちゃっては置かれねえ。その当人も可哀そうだ。早くなんとかしてやりたいと思うのだが……」

お鷹といえは將軍の飼い鳥である。それを逃がした鷹匠は命にかかわる椿事ちんじで、かれは切腹でもしなければならぬ。本人は勿論、その親類どもがうろたえて騒ぐのも無理はなかつた。

「そこで、そのお鷹はどこでどうして逃がしたのですかえ」と、

半七は訊きいた。

「それが重々悪い。遊ゆう所場しよばで取り逃がしたのだ」

「宿しゆくですぬ」

「そうだ。品川の丸屋という女郎屋だ」

善兵衛の説明によると、事件の顛てん末まつはこうであつた。鷹匠の

光井金之助が、二人の同役と連れ立つて、きのうの午ひるすぎから目

黒の方角へお鷹馴らしに出た。鷹匠はその役目として、あずかり

の鷹を馴らすために、時々野外へ放しに出るのである。由来、鷹

匠なるものは高百俵、見習い五十俵で、決して身分の高いもので

はないが、將軍家の鷹をあずかつてるので、「御鷹匠」と呼ば

れて、その拳こぶしに据かえているお鷹を嵩かさに被きて、むやみに威張り散ら

したものである。かれらは絵で見るように、小紋の手甲てっこうぎ脚絆やはんわ草鞋穿らじばきで菅笠をかぶり、片手に鷹を据えて市中を往来する。その場合にうっかり彼等にすれ違ったりすると、大切なお鷹をおどろかしたと云つて、むずかしく食つてかかる。その本人はともかくも、その拳に据えているのは將軍家の鷹であるから、それに対してはどうすることも出来ないのです、お鷹をおどろかしたと云いかけられた者は、大地に手をついてあやまらなければならぬ。万事がこういう風で、かれらはその捧げている鷹よりも鋭い眼をひかせて、江戸の市民を睨みまわして押し歩いてゐた。

かれらが野外へお鷹馴らしに出る場合には、多くその付近の遊女屋に一泊するのを例としていた。よし原と違って、新宿や品川

には旅籠屋はたごしやに給仕の女をおくという名義で営業しているのであるから、かれらの宿泊を拒むこぼわけには行かない。それが一種の弱い者いじめであつて、一旦かれらを宿泊させた以上は、ほかの客を取ることを許さないのである。三味線や太鼓は勿論、迂濶うかつに廊下をあるいても、お鷹をおどろかしたという廉かどで厳しく痛め付けられるのであるから、家うち中じゆうの者は息を殺して鎮まり返つていなければならぬ。したがつて、その一夜は営業停止である。どんな馴染み客が来ても断わるほかはない。それは遊女屋に取つて甚だしい苦痛であるので、せいぜい彼等を優遇した上に、ある場合には幾らかの「袖の下」をも遣つかつて、大抵のことを見逃がして貰うのである。その厄介きわまる御鷹匠三人が品川の丸屋に泊り込

んだ夜に、一つの椿事がしゅつたい出来した。

三人の鷹匠は光井金之助、倉島伊四郎、本多又作で、いずれもまだ二十一二の若い者であるので、丸屋の方でも心得ていて給仕としてお八重、お玉、お北という三人の抱妓かかえを出した。そのなかで一番容貌きりようのいいお八重が金之助のそばに付いていることになった。金之助も三人の鷹匠のなかでは一番の年下で、男振りも悪くない、おとなしやかな男であった。普通の客とは違うので、女達もせいぜい注意して勤めていたが、そのなかでもお八重は特別に気をつけて若い鷹匠を歓待した。御鷹匠といええば一概に恐ろしいもののように考えていたお八重は、案外に初心うぶでおとなしい金之助を憎からず思ったらしい。こうして、仲よく一夜を明かした

が、朝になつて三人が帰り支度をしている間に、お八重と金之助とが何かふぎけ出したらしく、女は男を打ぶつたり叩いたりしてきやつきやつと笑つた。いつもの云いがかりとは違つて、それがほんとうに大切の鷹を驚かしたらしく、俄かに羽搏はばたきをあらくした鷹はその緒を振り切つて飛び起たつた。丸屋は宿の山側にある家うちで、あいにくお八重の座敷の障子が明け放されていたので、鷹はそのまま表へ飛び去つてしまつた。

不意の出来事におどろかさされて、二人はあれあれと云つているうちに、鳥の姿はもう見えなくなつた。その騒さわぎを聞きつけて伊四郎も又作もびっくりして駈けつけたが、今更すべどうする術もないので、三人は顔の色を変えて、しばらくは唯ぼんやりと突つ立つ

ていた。まして其の本人の金之助は殆ど生きてゐる心持はなかつた。それに係り合いのお八重もどんなお咎めをうけるかとふるえ上がった。

なにしろ、これは内密にして置いて、なんとかして彼かのお鷹を探し出すよりほかはないと、年とし嵩かさの伊四郎がまず云い出した。

実際それよりほかには知恵も工夫もないので、二人もそれに同意して、丸屋の者にも固く口止めをして置いて、早々に千駄木の御お

たかじよ

鷹所へ帰つて来た。当人の金之助は勿論であるが、連れ立つて

いた伊四郎、又作も何等かのお咎めは免かれないので、その親類一門も俄かにうろたえ騒いで、寄りあつまっているいろいろ評議の果てが、これは内密に町まち方かたの手を借りて詮議するのが一番近道で

あるらしいということに決定して、金之助の叔父の弥左衛門が取りあえず山崎善兵衛のところへ駈けつけたのであった。

この事情をくわしく話した上、善兵衛は一と息ついた。

「まあ、そんな筋道なのだが、どうだろう、何とかなるめえか。

心柄とは云いながら、本人はまず切腹、連れのものも御役御免か、謹慎申し付けられるか、なにしろ大勢の難儀にもなることだ。考えてみれば可哀そうだからな」

「そうでございますよ。御鷹匠もこの頃あんまり羽はねを伸ばし過ぎるからね」と、半七は云った。「併しそれはまあそれにして、出来たことは何とかしてやらざありませんまい。まったく可哀そうですね」

「なんとかなるだろうか」

「生き物ですからね」と、半七は首をかしげていた。

おなじ生き物のうちでも飛ぶ鳥と来ては最も始末がわるい。まして鷹のような素捷すばやい鳥はどこへ飛んで行ってしまったか判らない。それを探し出すというのは全く困難な仕事であると、さすがの半七も胸をかかえた。

「まあ、なんとか工夫して見ましょう」

「工夫してくれ。光井金之助の叔父も涙をこぼして頼んで行ったのだからな」

「かしこまりました」

ともかくも受け合って、半七は善兵衛の屋敷を出たが、どう考

えてもこれは難儀の役目であつた。雲をつかむ尋ね物というが、これは空を飛ぶ尋ねものである。神田へ帰る途中も彼はいろいろに考えた。

「家へ帰つてもしようがねえ。ともかくも品川へ行つて見よう」
こう思い直して、かれは更に爪先を南に向けると、この頃の空の癖で、時雨しぐれを運び出しそうな薄暗い雲が彼の頭の上にひろがって来た。

二

半七は品川の丸屋へ行つて、主人にも逢つた。お八重にも逢つ

た。主人はどんな飛ばつちりを食うのかとおびえているらしかったが、取り分けてお八重は真つ蒼さおになつていた。なにぶんにも鳥のことであるから、別に詮議のしようもなかつたが、それでも一応はお八重の座敷へ通つて、鷹の飛んで行つた方角などを聞き定めて歸つた。

丸屋の暖簾のれんをくぐり出て、半七はまた考えた。鳥の飛んで行つたのは目黒の方角らしい。現に金之助らも目黒へ鷹馴らしに出かけたのである。して見ると、鷹はそこらに降りたかも知れない。なにしろ念のために一応その方角を調べてみようと思ひ立つて、彼は更に目黒の方に足を向けると、空の色はいよいよ悪くなつて来た。

「降られるかな」

半七は空をみながら急いで行つた。これがほかの事件ならば、それぞれに筋道を立てて、搜索の歩をすすめるのであるが、事件が事件であるだけに、半七もいわゆる行きどころばつたり探しあるくよりほかはなかつた。まことに知恵のない話だとは思つたが、半七は差し当りここの村々の名主なぬしをたずねて、誰か鷹を見つけたか、あるいは鷹を捕えたかを聞き合わせようとした。

庶人が鷹を飼うことは遠い昔から禁じられている。鎌倉時代、足利時代、降くだつて徳川時代に至つては、その禁令がいよいよ嚴重になつて、ひそかに鷹を飼うものは死罪、それを訴人したものは銀五十枚を賜わるということになつていた。したがつてそこら

の村々で鷹を見つけ、又は鷹を捕えたものは、その村名主に届け出るにきまつている。足に緒をつけている鳥であるから、あるいは遠く飛ばないでここらの村の者に捕われまいとも限らない。こう思つて、半七はまず名主の宅をたずねようとしたのである。

堤を降りた川の縁で、二人の女が真つ白な大根を洗っていた。それを見つけて、半七は声をかけた。

「もし、名主様の家はどこですうちね」

ふり向いたのはいずれも若い女であった。一人は頭の手拭をはずしながら答えた。

「名主様の家はこの堤をまつすぐに行つて、それから右へ曲がつて、大きい竹藪のある家ですよ」

「ありがとう。それから……姐ねえさん達は、けさこちらへ鷹の降りたという噂を聞かなかつたかね」

二人の女は黙っていた。

「知らないかえ」

「知りませんね」と、初めの女が答えた。

「いや、ありがとう」

挨拶して半七は別れた。教えられたままに名主の家をたずねて、鷹のことを聞き合わせると、村じゅうで誰も見つけたものはないらしく、現に今までも届けて来たものは無いとのことであった。鷹は前にもいう通り、普通の家で飼うべきものでない。その鷹の詮議とあれば容易ならぬことと察したらしく、名主も眉をよせて

訊いた。

「そのお鷹はやはり御鷹所のでございますか」

「千駄木のですよ」と、半七は正直に答えた。「しかし、これは内密に探索しなければならぬのですから、おまえさんの方でもそのつもりで……。なにか心当りがありましたら、わたしのところまでこっそり知らせてください」

「承知しました」

名主によく頼んで置いて、半七はそこを出ると、空の色はいよいよ怪しくなつて来た。引返して名主のところへ傘を借りて来ようかと思つたが、それも面倒だとその儘まますたすた歩き出すと、川の縁でさっきの二人の女にまた逢つた。

「や、さつきはありがとう」

女たちは無言で会えしやく釈して別れた。村はずれまで来かかると、時雨しぐれがとうとうぎつと降って来たので、半七は手拭をかぶりながら早足に急いでくると、路ばたに小さい蕎麦屋そばを見つけたので、彼は当座の雨やどりのつもりで、ともかくも暖簾のれんをくぐると、四十ばかりの女房ごうきんが雑巾のような手拭で濡れ手を拭きながら出て来た。

「いらつしやいまし。おあつらえは……」

「そうさなあ」

云いながら半七は家のなかを見まわした。この小ぎたない店付きではどうで碌なもの出来まいと思ったので、彼は当り障りの

ないように花巻の蕎麦を注文すると、奥から五十ばかりの亭主が出て来て、なにか世辞を云いながら釜前へまわって行つた。すすけた壁をうしろにして、半七は黙つて煙草をのんでいると、外の時雨はひとしきり強くなつて来たらしく、往來のさびしい街道にも二、三人の駈けてゆく足音がきこえた。と思ううちに、一人の男がこの雨に追われたように駈け込んで来た。

「やあ、降る、降る。こんな雨になろうとは思わなかつた」

男の菅笠からはしずくが流れていた。かれは手甲脚絆の身軽な扮装いでたちで、長い竹の継竿つぎやぶを持っていたが、その竿にたくさんの鳥とりもち糺もが付いているのを見て、それが鳥さしであることを半七はすぐに覺つた。彼は時々ここへ来ると見えて、蕎麦屋の夫婦とも

懇意であるらしく、たがいに馴れなれしくなにか挨拶していた。

狭い店であるから、彼は半七のすぐ前に腰をおろして、濡れた笠をぬぎながら会釈した。

「悪いお天気ですね」

「そうでございます」と、半七も会釈した。「とりわけお前さん方はお困りでしょう」

「まったくですよ。藪をぬらしてしまうのでね」と、鳥さしは腰につけていた鳥籠を見返りながら云った。

「おまえさんは千駄木ですか、それとも雑司ヶ谷ですかえ」

「千駄木の方ですよ」

徳川家の御鷹所は千駄木と雑司ヶ谷の二カ所にある。鳥さしは

それに付属する餌取りえとという役で毎日市中や市外をめぐる、鷹の餌にする小雀を捕つてあるくのである。鷹のゆくえを詮議している折柄に、あたかも鳥さしに出合つて、しかもそれが千駄木であるということが何かの因縁であるように思われたが、勿論、この鳥さしはお鷹紛失のことを知らないに相違ない。うっかりしたことをしやべつて善いか悪いかと、半七はしばらく躊躇していた。鳥さしはもう五十を二つも三つも越えているらしいが、背の高い、色の黒い、見るからに丈夫そうな老人であつた。

鳥さしはかけ蕎麦を注文して食つた。半七も自分のまえに運ばれた膳にむかつて、浅草紙のりのような海苔のりをかけた蕎麦を我慢して食つた。そのいかにも不味まずそうな食まい方を横目に視て、鳥さしの

老人は笑いながら云った。

「ここらの蕎麦は江戸の人の口には合いますまいよ。わたし達は御用ですからここらへも時々廻つて来るので、仕方無しにこんなところへもはいりますが、それでも朝から駄げあるいて、腹が空いている時には、不思議に旨く食えますよ。はははははは」

「そうですね。江戸者は詰まらない贅ぜい沢たくを云つていけませんよ」
こんなところから口がほぐれて、半七と鳥さしとは打ち解けて話し出した。外の雨はまだ止まないの、二人は雨やどりの話し相手というような訳で、煙草を喫すいながらいろいろの世間話などをしていくうちに、半七はふと思ひ出したように訊いた。

「おまえさんは千駄木だと仰しやるが、御組ちゆうに光井さんと

「かたいう方がありますかえ」

「光井さんというのはあります。弥左衛門さんに金之助さん、どちらも無事に勤めていますよ。おまえさんは御存じかね」

「その金之助さんというお方に一度お目にかかったことがあります。まだ若い、おとなしいお方で……」と、半七はいい加減に答えた。

「はあ、おとなしい人ですよ」と、老人はうなずいた。「組中でも評判がいいので、ゆくゆくはお役付きになるかも知れません」その金之助がまかり間違えば切腹の重大事件を仕でかしていることを、鳥さしの老人は夢にも知らないらしかつた。それからだんだん話して見ると、この老人は光井金之助という若い鷹匠に対し

てよほどの好意をもっているらしく、しきりに彼の出世を祈るよ
うな口ぶりであった。由来、鷹匠と餌取りとは密接の關係をもつ
ている職務でありながら、その折り合いがどうもよくないもので、
餌取りに褒められる鷹匠はあまり多くない。その餌取りの老人が
しきりに金之助を褒める以上、双方のあいだに特別の親しみがあ
るらしく察せられたので、半七はむしろこの老人を語らつて自分
の味方に引き入れようかとも考え付いた。

「おまえさんはけさ早くに千駄木をお出かけになりましたかえ」
「六ツ半頃に出ました」と、鳥さしの老人は答えた。

「それじゃあ光井さんのことをなんにも御存知ないんですか」と、
半七は小声で云つた。

「光井さんがどうかしましたか」

「これはここだけのお話ですが、光井さんはけさお鷹を逃がしたので……」

老人の顔色は俄かに変った。

「それはどこで逃がしたのです」

「品川の丸屋という家の二階で……」

「丸屋で……」と、老人はいよいよ其の顔をしかめた。

鷹を逃がした前後の事情を聞かされて、老人は太息といきをついていた。かれは殆ど途方に暮れたように其の首をうなだれたまま、しばらくは何にも云わなかった。その苦勞の色があまりに甚だしいので、半七も少しく意外に感じた。普通の親しみというのを通り

越して、この老人と若い鷹匠とのあいだには、なにか特別の關係があるのではないかと疑った。

この時に、裏口から若い女がはいって来て、ぬれた袂たもとや裾を釜前で乾かしていた。半七はふと見ると、それはさつき川端で出逢った二人の女のひとりで、どこをどう廻めぐつて来たのか、たった今この家へ戻かえつたらしい。年のころは二十歳はたちばかりで、色の白い、小肥りにふとつた、憎気のない娘であつた。かれは半七と顔を見あわせて無言で会釈した。

「たびたびお目にかかるね」と、半七は笑つた。「おまえはここの家うちの娘さんかえ」

「はい」と、娘は初めて口をきいた。「あの、名主さんの家は知

れましたか」

「知れた。知れた」

この話し声で気がついたらしく、鳥さしの老人は思わず顔をあげて娘の方を見かえると、娘は老人に向つても無言で会釈した。しかも老人と顔を見あわせて、娘の眼の色が俄かに変つたらしいのを、半七は決して見逃がさなかつた。

老人は再び首を垂れてしまったが、娘はやはり^{けわ}嶮しい眼をして老人をじつと眺めていた。

娘は仔細ありげな眼をして老人をうかがっている。老人は首を垂れて黙っている。そこにどんな事情が忍んでいるかを半七も容易に想像することは出来なかつたが、とにかくに老人の苦勞があまり大きそうなので、半七も黙っているわけには行かなくなつて、小声で彼を励ますように云つた。

「ねえ、おまえさん。もうこうなつたらお互いに考えていても仕方がありません。わたしは神田三河町の半七という御用聞きで、実は八丁堀の旦那から内密にその詮議を云い付けられているんです。お前さんは光井さんと心安いようではあるし、犬も朋輩、鷹も朋輩、いわば朋輩同士のことだから、なんとかわたしに手伝つて、そのお鷹を早く見つけ出す工夫をしてくれませんか。逃がし

た鳥さえ無事に探し出せば、そこは何とでも穏便に済むだろうじやありませんか。ねえ、そうでしよう」

「そうです、そうです」と、老人は力を得たようにうなずいた。

「それよりほかにしようはありますまい。わたしに出来ることならば何でも手伝いをいたしますから、どうぞ一刻も早くそのお鷹を探し出してください。わたしからもくれぐれもお願い申します」

「おまえさんが手伝ってくださいれば、蛇じやの道は蛇へびで、わたしの方でも大変に都合がいい。いい塩梅あんばいに雨も大抵やんだようだから、そろそろ出かけながら相談しようじやありませんか」

半七は鳥さしの分も一緒に勘定を払って出ると、老人はひどく

気の毒そうに礼を云いながら半七のあとに付いて出て来た。鳥さしも鷹匠とおなじことで、ふだんは御用を嵩かさにきて、かなり大おおづ面らをしているものであるが、この場合、かれは半七の救いを求めるように至極おとなしく振舞っていた。二人は雨あがりの田舎道をひろいながら歩いた。

「おまえさん、あの蕎麦屋の娘を知っていなさるのかえ」と、半七はあるきながら訊いた。

「はあ、時々あすこの家うちへ寄りますので、夫婦や娘とも心安くして居ります。娘はお杉といって、この間まで奉公に出っていたのでございますよ」

「もう二十歳はたちぐらいでしょうね」

「左様だそうです。当人はもう少し奉公していたいと云うのを無理に暇を取らせて、この春から家へ連れて来たのですが、やはり長し短しで良い婿がないそうで、いまだに一人でいるようでございます」

「どこに奉公していたんです」

「雑司ヶ谷の吉見仙三郎という御鷹匠の家にしたのだそうです。

そんな訳で、わたしとは特別に心安くしているのですが……」

「その吉見というのは幾つぐらいの人ですね」

「二十三四にもなりましようか」

「独り身ですかえ」

「組が違うのでよく知りませんが、もう御新造ごしんぞがある筈です。そ

うです、そうです。御新造様があると、あのお杉が話したことがありました。吉見さんには時々逢うこともあります、色のあざ黒い、人柄のいい、なかなか如じよさい才さいない人です。そのかわり随分道楽もするそうですが……」

「そうですか」と、半七は一々うなずきながら聴いていた。「あの娘は何年ぐらい吉見さんに奉公していたんですえ」

「なんでも十七の年から奉公していたとかいうことです」

「雑司ヶ谷の組の人たちも目黒のほうへお鷹馴らしに出て来ますかえ」

「ときどきに出て来ます」と、老人は答えた。

半七はしばらく立ち停まって思案していたが、やがて左右を見

かえつてささやいた。

「おまえさん。御苦労だが、もう一度あの蕎麦屋へ引つ返してくれませんか」

「はあ」と、老人は不審そうに半七の顔を見た。「なにか、忘れ物でも……」

「さあ、どうも大きな忘れ物をして来たらしい」と、半七はほほえんだ。「おまえさんの鳥籠にはまだ三匹しかはいっていませんね」

「けさは遅く出て来たものですから、まだ一向に捕れません」

「むむ、三匹でもいいが、そうですね、もう二、三匹捕れませんかえ」

「今はここにたくさん寄る時分ですから、二羽や三羽はすぐに捕れます」

「じゃあ、済みませんが、そこらへ行つて二、三匹さして来てくれませんか。なるべく多い方がいい」

老人はその意味を解げし兼ねたらしいが、云われるままに承知して、竹竿のぬれた糰もちを練り直していると、しぐれ雲はもう通り過ぎてしまつたらしく、初冬の弱い日のひかりが路傍の藁屋根をうす明るく照らして来た。

「いい塩梅に日が出て来ました。これなら二羽や三羽は訳なしです」と、老人は空を見あげながら云つた。

「なるべく多い方がいいんですね」

「と云つて、二十匹も三十匹も要いるわけじゃありません。まあ、五、六匹か、十匹もあればたくさんだろうと思うんです。そうすると、わたしはもう一度、あの蕎麦屋へ行つていますからね。雀が捕れ次第に引つ返して来てください」

約束して二人は別れた。半七はまた引つ返して蕎麦屋の前に来ると、むすめのお杉は暖簾から首を出して、仔細らしくこつちをうかがっているらしかつた。

「おい、ねえさん。ちよいと用がある。こつちへ来てくんねえ」
半七は小手招こてまねぎをして娘を呼び出した。お杉は少しく躊躇ちゅうちゆしているらしかつたが、とうとう思い切つて外へ出て来た。二人は大きい榎えの木の下に立つて、脚もとに遊んでいる鶏をながめながら

小声で話し出した。

「姐ねえさん、おまえさんの名はお杉さんというんだね」と、半七はまず訊いた。

お杉はやはり無言でうなずいた。

「わたしは神田の半七という御用聞きだ。今おまえを調べるのは御用だから、そのつもりで何でも正直に云つてくれないじゃあ困る。いいかえ」と、半七はまず嚇おどして置いて、それから吉見の屋敷の奉公のことを訊いた。

それに対して、お杉は正直に答えた。自分は十七の春から雑司ヶ谷の吉見の屋敷に奉公して、この二月の出代りのときに暇を取つて退がったと云つた。吉見仙三郎は養子で、家付きの娘お千江

と五年まえから夫婦になつたが、お千江はとかく病身で、夫婦の仲にはまだ子供もないということも話した。

「おまえは婿を取るために家へ帰つたんだらう」と、半七は笑いながら訊いた。

「そう云つて無理にお暇をいただいたのです」

「それでなぜ婿を取らねえ。気に入つたのがねえのか」

お杉はすこし顔を赧あかくして黙つていた。

「吉見の旦那は時々たずねてくるのかえ」

お杉は眼をひからせて半七の顔を屹きつと見たが、すぐに又うつむいてしまった。

「え、そうだらう。吉見の旦那はゆうべ来やしなかつたか。え、

来たろうな」

お杉はやはり黙っていた。半七はその肩に手をかけて云った。

「え、ほんとうに来たろう。隠しちやあいけねえ」

「いいえ」

「たしかに来ねえか」

「おいでになりません」と、お杉はきつぱり答えた。

「嘘をついちやあいけねえぜ。嘘をつくと飛んだことになる。吉

見さんは全く来ねえか」

「一度もおいでになりません」

半七は黙ってお杉の顔色をながめていると、足もとの鶏がだしぬけに時を作ったので、お杉は思わず顔をあげた。その顔はいつ

か蒼ざめていた。

おとなしそうに見えてもなかなか強情らしいので、半七はこの上の詮議は無駄であろうと思った。もちろん彼女を引つ張つて行つて、表向きに吟味する術すべがないでもないが、町方まちかたと違つてここらは郡代ぐんだいの支配であるから、公然彼女を吟味するとなれば、どうしても郡代の屋敷へ引つ立てて行かなければならない。そうになると、この事件は明るみへ持ち出されて、たといその鳥のゆくえは判つたとしても、光井金之助らは当然その咎めをうけなければならぬ。それではなんにもならないと思つたので、半七はひとまずお杉の詮議を切り上げることにした。

「いや、そう判つたらもうそれでいい。お父とっさんや阿母おっかさんに

はこんなことは黙っているがいいぜ」

お杉は網を逃がれた小鳥のように、早々に会釈して立ち去った。暖簾をはいる彼女のうしろ姿を見届けて、半七は二、三軒先の荒物屋へ寄ると、まだ若い女房が火鉢のまえで継ぎ物つをしていた。

「麻裏はありませんかえ」

「いらつしやい」と、女房は針をやすめて起つて出た。「どうも宜しいのが切れて居りまして……」

「なんでもいい。俄か雨でこの通り泥だらけにしてしまったのだから、何か丈夫そうなのを下さいな」

どうで気に入ったのは無いと承知の上で、半七はありあわせた麻裏草履を一足買った。かれは店口に腰をかけて、その草履を穿は

きかえながら訊いた。

「おかみさん。その蕎麦屋の娘は雑司ヶ谷に奉公していたんだね」

「よく御存じで……。そうでございますよ」

「わたしもあの辺の者だから知っているんだが、あの娘は御鷹匠の吉見さんの御屋敷に奉公していたんだろう」

「そうでございますよ」と、女房はうなずいた。

「だが、どうして暇を取るようになったのかなあ」と、半七はわざと首をかしげて見せた。「そんな筈じゃあないんだが……」

「お杉さんの忌いやがるのを、親たちが無理に下げたのだということでございますよ」

「そうだろう。御新造は病氣だし、旦那が暇をくれる筈はないんだから」

女房はすこし驚いたように半七の顔を見たが、やがて又笑い出した。

「ほほ、なにもかも御存じなのでございますねえ」

「知っているよ。今もいう通り、すぐ近所に住んでいるんだから」と、半七も笑った。「その一件があるので、あの娘はまだ婿を取らないんだろう。え、そうだろう」

女房は意味ありげに笑っていた。

四

半七にかまをかけられて、荒物屋の女房はどうとうおしやべりをしてしまった。その話によると、お杉は十七の春から吉見の屋敷へ奉公に出ているうちに、病身の妻を持つている主人と一種の関係が結ばれた。そんなことは知らないお杉の両親は、もう年頃になった娘をいつまで奉公させて置くでもない、家へ帰つて相当の婿を取らせなければならぬというので、忌がる娘を無理に連れて帰つたが、そういう秘密があるので、お杉は容易に婿を取らうと云わないばかりか、店の手伝いも碌々にしないので、この頃は親子喧嘩が絶えないとのことであつた。

「それでもさつきあの^{かわ}川つ^{ぶち}縁で大根を洗つていたぜ」と、半七

は云った。

「まあ、その位のことはするでしょうけれど……」と、女房はほへえんだ。「ここらにいれば其のくらのことは当りまえですもの。それで何でも以前の旦那様というのが時々たずねていらつしやるんですよ」

「あすこの家へ来るのかえ」

「いいえ、親たちは堅い人ですから、そんなことは出来ません。この先の辰さんの家で、ほほほほ」

いくらか法界ほうかいりんぎ恠気もまじつて女房はこんな秘密までもべらべらしやべった。辰蔵というのは小料理屋の亭主であるが、身持ちのよくない人間で小博奕ぼくちも打つ男である。料理屋といっても、家

には老母と小女こおんながいるきりなので、お杉はどんなふうに頼み込んだか知らないが、その家を逢い曳びきの場所に借りて、ときどきに旧主人に逢っている。それを近所ではみんな知っているが、お杉の親たちは不思議に知らないらしい。知れたらきつとなにかの面倒が起るであろうと女房は仔細らしく話した。

「なるほど、そいつは粹いきじしと事だね。不動前まで行ったら、もつといい茶屋もあるだろうに……」と、半七は笑った。多寡たかが百俵取りで、おまけに道楽者の吉見としては、金廻りが悪いに相違ない。ここの小料理屋が分相当であるかも知れないと彼は思った。

これでまずお杉と吉見との関係は確かめられた。ゆうべも吉見が来たらしいかと訊いたが、荒物屋の女房もさすがにそこまでは

知らないと言った。そこへ鳥さしの姿が見えたので、半七は外へ出て招くと、老人は藪竿をかかえて小走りに急いで来た。

「もし、これだけ捕って来ました」

老人は一生懸命になってあさ狩り歩いたらしい。運の悪い雀が十二三羽も籠の中に押込まれていた。

「たいそう捕れましたね」と、半七は笑いながら云った。「それだけあればたくさんです。ところで、どうでしょう。その雀の羽には藪が付いているが、それでも飛べますか」

「飛べるのもあり、飛べないのもあります」と、老人は云った。

「しかし、どうせこの藪は洗って取るのです。藪の付いているままでお鷹にやるわけには行きませんかからね」

「ここで逃がさないように巧く洗えますかえ」

「そりや洗えないことはありませんよ」

「そうですね。だが、まあ、その儘にして出かけましょう」

「これから何処へまいります」

「すぐその料理屋へ行くんです」

半七は老人に何かささやくと、彼はおとなしくうなずいた。草履の代を払って、半七は先に立って出てゆくと、やがて彼の^か辰蔵の店のまえに来た。小料理屋といつても、やはり荒物屋兼帯のよな店で、片隅には草鞋や^{しぶうちわ}浣扇などをならべて、一方の狭い土間には二、三脚の床^{しょうぎ}几が据えてあった。その土間をゆきぬけた突き当りに、四畳半ぐらいの小座敷があるらしく、すすけた障

子が半分明けてあるのが表からみえた。店口の柳の木には一匹の荷馬がつないであつた。と思うと、店のなかでは俄かに唳鳴る声
がきこえた。

「この野郎、横着な野郎だ。三日の約束がもう五日になるでねえ
か」

半七は表から覗いてみると、今しきりに唳鳴っているのは、三
十五六の赭あから顔の大男で、その風俗はここの馬子まごと一と目で知
られた。その相手になつて何か云い争っているのは、やはりおな
じ年頃の色の黒い、中背の男で、おそらく亭主の辰蔵であろうと
半七は想像した。

「嘘つき野郎め、ふてえ奴だ、われには何度だまされたか知れね

えぞ。もうその手を食うものか、耳をそろえて直ぐに渡せ」と、馬子は嵩かさにかかつて哮たけり立った。

「嘘をつく訳じゃねえ。今ここにねえから我慢してくれと云うのだ。近所隣りの手前もあらあ。無暗むやみに大きな声をするな」と、辰蔵は着物の襟を搔き合わせながら云った。

「なんの、遠慮があるものか。貴様が横着の嘘つき野郎ということは不動様も御存じで、近所隣りでもみんな知っているんだ。それが口惜くやしければ銭ぜにを出せ」

「だから、少し待てと云うのだ」と、辰蔵はそらうそぶいていた。「多寡が盆の上の貸し借りだ。まさかに名主や代官所へ持ち出すわけにもいくめえ。いくら騒いだって始まらねえ理窟だ。まあ、

おとなしくあしたまで待つがいい。きょう中にはきつと金のはいるあてがあるんだから」

「その嘘はもう聞き飽きた。貴様のような奴に一杯食わされて、べんべんと待つてゐる俺じゃねえだ。さあ、すぐに出せ。これだけの家台骨を張つていて、一貫と二百ばかりの銭がねえとは云わせねえぞ」

馬子は辰蔵の胸ぐらを引つ掴んで小突きまわすと、辰蔵も半はんにて纏んをぬいで起ち上がった。そばに十四五の少女がぼんやり突つ立っているが、相手の権幕が激しいので取り鎮めるすべもないらしい。老母らしい女のすがたは見えなかつた。

二人の問答によつて想像すると、馬子は博奕の貸しを催促に来

たらしい。この行きがかりではどうでも一と騒動なくては納まるまいと、半七は黙って表から覗いていると、果たして二人の拳固が入り乱れて打ち合いをはじめた。力づくでは馬子の方が強いらしく、辰蔵は忽ちその利き腕を捻じ曲げられて、床几の上に押し付けられると、床几はかたむいて倒れて、馬子も辰蔵に折りかさなつて土間にころげた。もう見てもいられないので、半七は店へはいつて声をかけた。

「おい、おい、どうしたんだ。おれ達はさつきから待っているじやねえか。喧嘩はあとにして、お客様の方をどうかしてくれ」

哮り狂^{たけ}っている二人の耳には、その声が容易に聞えないらしいので、半七は舌打ちをしながら進み寄つて、まず馬子の腕を押え

付けた。捕物に馴れている半七に利き腕をつかまれて、暴れ狂っている馬子もいたずらに身をもがくばかりであった。

「まあ、静かにするがいい。ここの家の商売の邪魔にもなる。今聞いていりやあ盆の上の貸し借りだというじやあねえか。そんな野暮に催促するにも及ばねえ。ここの亭主もきよう中には金がきつとはいるというんだから、わたしが仲人だ。まあ待つてやるがよかろうぜ」

馬子は黙つて半七の顔をながめていたが、腕をつかんだ手際てぎわといい、その風俗といい、その口振りといい、なんだか薄気味悪くも感じたらしく、無言のまま、のそのそと表へ出て行つてしまつた。

「やい、待て。野郎」

跳ね起きてそのあとを追おうとする辰蔵を、半七はまた押えた。

「おめえも大人おとなげ気ねえ。まあ、落ち着くがよかろう。こうして、

お客様が二人はいつて来たんだ」

無ならずもの頼漢でも博奕打ちでも、さすがに客商売の辰蔵は客に対し

て苦にがい顔をしているわけにも行かなかつた。殊に相手の馬子は繫

いである馬を解いて、そのまま出て行ってしまったので、彼は眼
の前の客をかき退のけてそれを追ってゆくことも出来ないの、着
物の泥をはたきながら急に笑顔を作った。

「どうも相済みません。飛んだところをお目にかけてまして……」

「おめえは苦勞人らしい。あんな馬子を相手にしてどたばたしち

やあいけねえ」と、半七は笑いながら床几に腰をかけた。

「まことに恐れ入りますが……」と、辰蔵は突ん曲がつた鬚まげの先を直しながら云った。「懇意先に急病人が出来たというので、おふくろはその手伝いに行きましてね。もう午過ぎだというのに、まだなんにも支度がしてねえのでございますが……。まあ、お茶でも上がって、どこかよそへお出でなすってください」

かれは小女に指図さしずして、煙草盆と茶とを運ばせると、半七は表を見かえって声をかけた。

「もし、お前さんもここへ来て、茶でもお上がんなさい。ここの家じゃ何も出来ねえそうだから」

鳥さしの老人は、軒さきに藪竿を立てかけてはいって来た。そ

の人をみると、辰蔵の眼は急に光った。

五

「はあ、大きな銀杏いちようだな」

半七は茶を飲みながら往来をながめた。今までは気がつかなかったが、この店の筋向いには何か小さな祠ほこらのようなものがあった、その前の空地には可なり大きい銀杏の木が突っ立っていた。時雨を浴びた冬の葉は、だんだんに明るくなって来た日の下に、その美しい金色をかがやかしていた。

「なに、葉が落ちてしようがありませんよ」と、辰蔵は云った。

「だが、銀杏は冬がいい」

新らしい草履でぬかるみを爪立ってあるきながら、半七はその銀杏の前に立った。足の下には黄いろい落葉が一面にうず高くなっているのを、半七は何げなく眺めていたが、更に眼をあげて高い梢こずえを仰いだ。そうして又うつむいて、何かその落葉でも拾っているらしかったが、やがて店のなかへ引つ返して来た。

「おい、御亭主。この頃に誰かこの銀杏の木へ登りましたかえ」
「いいえ、そんなことは無いようです」と、辰蔵は答えた。

「だって、小さい小枝がみんな折れている。その折れた路がまっすぐに付いているのを見ると、どうも誰か登ったらしい。ここらに猿はいめえじゃねえか」

「そうでございます」と、辰蔵はよんどころなしに笑った。「それじゃあ近所の子供が銀杏ぎんなんを取りに登ったかも知れません。随分いたずら者が多うございますからね」

「そうかも知れねえ」と、半七は笑った。「それから木の下にこんな物が落ちていたが……」

それは一枚の小さい鳥の羽であつた。辰蔵は思わず覗き込んだ。「鳥の羽ですね」

「どうも鷹の羽らしい。もし、おまえさん。これは鷹でしょうね」
眼の前に突きつけられて、鳥さしの老人はその薄黒い小さい羽をじつと視た。

「そうです。たしかに、鷹の羽でございます」

「そうすると鷹があの木の上に降りて来て……」と、半七は銀杏のこずえを指さした。「足の緒おが枝にからんで飛べなくなつたところを、誰かが登って行って捉えたと、まあ、こう判断するんですね。小枝は折れている。木の下に鷹の羽は落ちている。まあ、そう判断するのが無理のないところでしようね」

云いながら辰蔵の顔をじろりと見かえると、彼は唾おしのように黙つて立っていた。

「まったく鷹の羽に相違ありませんよ」と、老人はかさねて云つた。

「そうですか」

半七は突然起ちあがつて辰蔵の腕を強く掴んだ。

「さあ、辰蔵。正直に云え。貴様はけさあの銀杏に降りた鷹を捕つたろう」

「御冗談を……。そんなことは知りません」

「知らねえものか。もう一つ、貴様に調べることがある。貴様の家へゆうべ雑司ヶ谷の鷹匠が泊つたろう」

「そ、そんなことはありません」

辰蔵は声をふるわせて云い訳をした。彼も堅気の人間でないだけに、早くも半七の身分を覚つたらしく、顔の色を変えておどおどしていた。大した悪党でもないらしいと多寡をくくつて、半七は畳みかけて責め付けた。

「やい、おれを見そこなやがったか、貴様たちに眠つぶしを食う

ような俺じゃあねえ。雑司ヶ谷の鷹匠の吉見仙三郎が蕎麦屋のお杉とここの家で逢い曳きをしていることも、俺はちゃんと知っているんだ。さあ、その鷹は貴様が捕ったか、はつきり云え」

「親分。それは御無理ですよ」と、辰蔵はいよいよ声をふるわせた。「わたくしは全くなにも知らねえんですから」

「まだ強情を張るか。貴様も大抵知っているだろうが、鷹を取れば死罪だぞ。貴様の首が飛ぶんだぞ。しかしこつちにも訳があるから、素直にその鷹を出してわたせば、今度だけは内分に済ましてやる。それとも俺と一緒に郡代屋敷へ行くか、どつちでも貴様の好きな方にしろ」

「でも、親分。ここは一軒屋じゃありません。近所にも大勢の人

が住んでいます。木の枝が折れていようと、鷹の羽が落ちていようと、何もわたくしと限ったことはございません。まったく私にはなんにも知らないのをごさいます」

「理窟をいうな。貴様が手をくだして捕らねえでも、たしかに係り合いに相違ねえ。きよう中に金がきつとはいるというのは、その鷹をどこへか売るつもりだろう。さあ、云え。貴様が捕ったか、それとも吉見が捕ったか」

床几の上に引き据えられて、辰蔵はまた黙ってしまった。その時、店の入口で何か物音がきこえたらしいので、眼のはやい半七はふと見かえると、いつの間に来ていたのか、かのお杉が柳のかげから一心にこちらを覗いているらしかった。彼女は半七の顔を

見ると、身をひるがえして一目散に逃げ出した。

「こん畜生、丁度いいところへ来た」

半七は辰蔵を突き飛ばして表へ飛び出すと、足の早いお杉はもう三、四間も行きすぎていた。咄嗟とっさのあいだに思案した半七は軒先に立てかけてある長い藪竿をとって駈け出して、お杉のあとを追いつながら、竿のさきで彼女の頭を押えた。蟬やとんぼを捕る子供の藪竿とは違って、本職の鳥さしの鳥藪であるから、お杉は右の横鬢から銀杏返しの根へかけてべつとりとねばりついた藪竿をどうすることも出来なかった。彼女は雀のように半七の藪竿に捕えられてしまった。それを無理に引き放そうとあせつているところへ、半七は竿を捨てて追いついて来た。

「さあ、来い」

お杉も辰蔵の店へ引き摺り込まれた。藪竿で人間をさしたのを初めて見た老人は、眼を丸くして眺めていた。

「さあ、これで二人揃った。さあ、片っ端から白状しろ。やい、お杉。なんでここへ覗きに来た。てめえはゆうべこの家へ泊り込んで、何もかも知っているだろう。鷹は誰が捕ったんだ」

白状しなければ死罪だと嚇おどされて、さすがは女だけにお杉はま
ず問いに落ちた。辰蔵ももう包み切れなくなつて白状した。半七
の鑑定通り、吉見とお杉はゆうべこの家で逢つた。けさになつ
て吉見が帰ろうとするときに、一羽の鷹が降りて来て銀杏のこず
えに止まつたが、その足の緒が枝にからんで再び飛ぶことが出来

なくなつたらしい。それを見付けた吉見はすぐに梢によじのぼつて、平生手馴れているだけに、無事にその鷹を捕えて来た。

それを郡代の屋敷へ届け出るか、または雑司ヶ谷へ持つて帰るか、二つに一つの処置を取れば別に何事もなかつたのであるが、そこで彼は辰蔵から或る知恵を吹き込まれた。この村に鷹を欲しがっている者がある。ないしよで彼に売つてやれば、大金になる仕事だと勧められて、ふところの苦しい吉見はふとその気になつた。買い手はこの村の大地主の当兵衛というもので、わたくしに鷹を飼えば重罪ということ承知していながら、いつの代にも絶えない金持のせんじょう 僭せんじょう 上から、自分も一度は鷹が飼つてみたいと望んでいることを、辰蔵はかねて知っていたので、とうとう吉見を

そそのかして、百五十両でその鷹を当兵衛に売り渡すことに相談を決めたのであった。

その約束をして吉見は帰った。金はあした受け取ることにして、辰蔵はともかくもその鷹を当兵衛の家へ送り届けた。

「よし、すっかり判った」と、半七は二人の白状を聴き終つて云つた。「そんなら辰蔵、すぐに当兵衛の家へ案内しろ。お杉は家へ歸つて神妙にしている」

辰蔵は先きに立つて店を出ようとした時、半七は急に思い付いたように老人を見かえつた。

「まだ少し趣向がある。出る前にその雀の羽を洗つてくれませんかね」

「承知しました」

鷹のありかもまず判つて、俄かに元氣のついた鳥さしの老人は、辰蔵に水を汲ませて、籠のなかの雀を一羽ずつ掴み出した。毎日手馴れている仕事であるから、雀の羽にねばりついていた鳥糞もたちまち綺麗に洗い落された。

「これで飛ぶには差し支えありませんね」と、半七は念を押した。
「きつと飛びます」

「これで支度が出来た。さあ、行きましょう」

三人はすぐに当兵衛の家をたずねた。大きい冠木門かぶきもんの家で、

生け垣の外には小さい小川が流れていた。半七は立ち停まって辰蔵に訊いた。

「貴様はさつきその鷹を持って来たときに、主人に逢つたんだらうな」

「逢いました」

「その鷹はどうした」

「入れる籠がないとかいっているので、ともかくも土蔵のなかへ入れて置くと云つていました」

「むむ、いずれ何処にか隠してあるに相違ねえ。こここの家に土蔵は幾つある」

「五戸前いつとまえある筈です」

半七は門の内へはいつて、すぐに主人の当兵衛を呼び出した。

「御用がある。土蔵の戸前をみんな明けて見せろ」

当兵衛はおどおどしながら何か弁解しようとするのを、半七は追い立てるようにして、奥の土蔵前へ案内させた。御用の声におしすくめられて、当兵衛は五つの土蔵の扉を一々にあけた。

「大きい土蔵だ。一々調べてもいられめえ。もし、おまえさん。願いますよ」

半七に眼配せをされ、鳥さしの老人はすすみ出た。かの籠の中から二、三羽の雀をつかみ出して、扉の間からばらばら投げ込むと、第一第二の土蔵には何のこともなく、第三の土蔵も静まり返っていた。半七は注意して、第四と第五の土蔵の扉を半分閉めさせた。

老人の手から投げられた三羽の雀が第四の土蔵へ飛び込むと、

やがてその奥であらい羽搏はばたきの音がきこえた。半七は老人と眼を見あわせて、すぐに扉のあいだから駈け込むと、うす暗い隅には鷹の眼が鋭くひかっていた。鷹はしきりに羽搏はばたきして、そこらを飛びまわっている小雀を搔い掴もうと睨んでいるのであった。しかもその脚の緒が嚴重に縛られているので、かれは思うがままに飛びかかることが出来ないらしい。心得のある老人は静かに進み寄って、その緒を解いてやると、鷹はすぐに飛びたつて一羽の獲物を掴んだ。ほかの二羽は運よく表へ飛び去ってしまった。

こうして、鷹はおとなしく老人の拳こぶしに戻った。鷹は一面に白斑しらふのある鳥で、雪の山と名づけられた名鳥であると老人は説明した。

これを表向きにすれば、大変である。

当兵衛は無論に死罪で、辰蔵も死罪をのがれることは出来まい。お杉は女のことであり、且つ直接の罪人でないから、あるいは処払いぐらいで済むかも知れないが、一旦その鷹を捕えながら更に他へ売り渡した吉見仙三郎は、不埒重々とあつてどうしても死罪である。遊女屋に夜をあかして、おあずかりの鳥を逃がした光井金之助もおそらく切腹であろう。一羽の鳥のために、四人の人間が命を捨てなければならぬかと思うと、半七もあまりに恐ろしくなつた。殊に初めから内密に探索するのが趣意であるから、鳥が無事に戻つたのを幸いに、彼は当兵衛と辰蔵に云い渡した。

「みんな運のいい奴らだ。きょうのことは必ず他言するな。世間

に洩れたら貴様たちの首が飛ぶぞ」

ふたりは土に頭を摺りつけた。鳥さしの老人も涙をながして半七を拝んだ。

それから二日経って、鳥さしの老人は神田の半七の家をたずねて来て、くり返して礼を云った。そうして、本人の光井金之助も、叔父の弥左衛門もあらためて礼に来ると云った。

「なに、わたしはお役だから仕方がねえ。そんなに恩に被^きせることもねえのさ」と、半七は答えた。「それにしても、おまえさんはどうしてそんなに光井さんの為に心配しなさるんだ。なにか格別に心安いのかえ」

「はい、おまえさんですから申し上げますが、実はわたくしには

十八になる娘がございますので……」

「十八になる娘……。おまえさんの娘なら美しかろう。それだけに、光井さんは品川なんぞへ泊るから悪い。これもみんな娘の思いだと云つてやるがいいや。ははははは」

半七は大きい声で笑つた。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（二）」光文社文庫、光文社
1986（昭和61）年3月20日初版1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5・86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：おのしげひい

1999年7月19日公開

2004年2月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

鷹のゆくえ

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>